

科目区分 大学院：教科教育専攻  
授業科目名 美術理論・美術史特論演習

## マンガ学・はじめの一步

美術教育講座 稲次保夫

### 【はじめに】

この授業「美術理論・美術史特論演習」は、大学院1年次・後学期の授業である。授業の目標は、(1)自ら問うべき問題を見だし、問題追究の方向性を探っていくこと、(2)作品の分析や資料の検討を通して、自らの問題に対する理解を深めていくこと、である。受講者は1名、卒論でアニメのことを考察し、大学院ではマンガについて研究を行っている者である。

### 【1】マンガ学会について

受講者と担当者の二人は、この授業に先立ち、日本マンガ学会（会場・松山大学）に参加した。二人とも初めての参加で啓発される場所が多く、この授業を展開する上でも大いに役立ったので少し触れておく。

マンガ学会の1日目は、『手塚治虫「再考」』をテーマに四つの研究発表があり、引き続き、手塚の少女マンガ『リボンの騎士』をめぐるラウンド・テーブルがあった。研究発表や報告には、大学院生など若い人のものも多かった。手堅い考証もあり熱っぽい主張もあって、とても面白かった。なかには、「結論を導くのに都合のいい資料だけを用いている」と指摘されている発表者もあった。

2日目は、「手塚のルーツ／ルーツとしての手塚」と題してのシンポジウムがあった。シンポジウムのパネリスト竹内オサム、夏目房之介の両氏は、今日のマンガ研究の草分けとも言える研究者で、両氏の著書は授業でも取り上げた。

### 【2】授業の内容とテキストの詳細

授業では、さまざまなマンガ作品を見ながら、マンガに関連するテキストを読んでいった。受講者と担当者はそれぞれ、テキストに関連するマンガ等さまざまなマンガを持ち寄った。授業で読む

テキストは、毎回そのつど決めた。テキストは、各人が授業に先立って予め読んでおくこととし、その際、受講者にはレジュメを作ってくるのが課せられた。

以下に、この授業で取り上げたテキストについて、少し詳しく紹介しておく。

最初に取り上げたのは、竹内オサム著『マンガ表現学入門』で、各章がそれぞれ一つの論文の形になっているものである。4章「同一化技法の系譜－視点論2」では、読者の視線と作中人物の視線を重ねあわせ両者を同一化する技法について述べている。そして手塚治虫『新宝島』には、それまでには見られない新しい型の同一化技法が数多く現れることを指摘し、手塚マンガの革新性を論証している。7章「コマとコマの連続性」は、田河水泡『のらくろ探検隊』などを例に、戦前のマンガにおけるコマ構成の基本型を指摘し、それが戦後のマンガにも受け継がれていくことを論じたものである。8章「時間のモザイク」は、マンガにおける時間表現のことを考察したもので、(1)一コマ内部の時間、(2)隣接するコマ相互の時間、(3)ストーリーとしての時間について、あだち充『陽あたり良好!』、萩尾望都『ポーの一族』などを例に論述している。

次に、秋田孝宏著『「コマ」から「フィルム」へ』という本から、その第10章「マンガの時間構造」を読んだ。このテキストは、石森章太郎『佐武と市捕物控』や大友克洋『AKIRA』、白土三平『忍者武芸帳』、北条司『キャッツ・アイ』など新旧さまざまな作品を取り上げながら、マンガに特有の時間構造について述べたものである。しかし、そこで使われている「二次元的」という言葉の曖昧さが、受講者・担当者の二人を悩ませ

た。

次に、スコット・マクラウド著『マンガ学』という本から、第3章「コマの隙間に何がある?」、および第4章「時間と空間の認知科学」を取り上げた。マクラウド氏はアメリカのマンガ家であり、『マンガ学』は、マンガのことをマンガによって解説した本である。第3章では、コマとコマの隙間の空白（マンガ学ではこれを「間白」と言うらしい）の重要性とその機能などが述べられている。第4章では、マンガにおける時間の感じかたは、たとえばコマの形によっても変わること、同じ場面を描くコマでも短いコマと長いコマとでは、長いコマの方が時間的にも長く感じられることなどが、マンガで分かりやすく示されていた。また、日本のマンガにみられる「動き」の表現の斬新さなど、日本人には気づかないような興味深い指摘もあった。

次に、夏目房之介著『マンガはなぜ面白いのかーその表現と文法ー』という本を取り上げた。マンガの描線、吹きだし、コマの構成や働きなど、マンガ表現の基本的なしくみが分かりやすく解説されており、むしろ授業の最初に読んでおいた方がよかったかもしれない。なかでも興味深いのは、第11章「少女マンガのコマ構成」で、桜沢エリカ『わたしに優しい夜』や桑田乃梨子『ほぐれゆく私』、高橋留美子『めぞん一刻』などを例に、少女マンガでは、コマとコマの間の隙間いわゆる「間白」を大きくとったり、外縁をもたないコマやページの外へと絵がはみでるコマ（マンガの世界で「断ち切り」という）が多用されること、そして、それらのコマが重なり合い内包し合うことで独特のコマ構成をなすことが指摘されている。

授業では、これらのテキストを毎回少しずつ読んでいった。毎回課されるレジュメの中で、受講者は、テキストの要約に加え、土貴智志『神風』、五十嵐大介『そらとびタマシイ』、尾田栄一郎『ONE PIECE』その他、さまざまなマンガ作品を取り上げその分析を試みた。いまだマンガ学への最初の一歩といったところであるが、作品を

分析しテキストを読み込んでいく中で、受講者の関心は「コマの構成」や「コマの働き」の問題に絞られていったようである。今後は、いくつかの作品について緻密な分析を行いながら、コマの問題に対する理解をさらに深めていく必要がある。そのことは、受講者自身が痛感しているようである。

### 【3】アンケートとその結果

受講者が1名なので、授業の展開のしかた、取り上げるテキストなど、受講者の意見や要望はそのつど聴いている。授業後のアンケートとその結果は、以下の通りである。

[1] から [6] は、(A) そう思う、(B) まあそう思う、(C) あまりそう思わない、(D) そう思わない、の記号での回答を、[7] [8] は、記述式での回答を求めた。

[1] この授業に意欲的に取り組みましたか (A)

[2] 担当教員の対応は適切でしたか (A)

[3] 授業により得るところがありましたか (A)

[4] 担当教員の熱意は感じられましたか (A)

[5] 大学院の授業として適切でしたか (B)

[6] 全体として満足のいくものでしたか (B)

[7] よかった点・よくなかった点

[8] 改善すべき点 (具体的に)

[7] [8] については、記述がなかった。

### 【おわりに】

この授業は、受講者にはとにかく、少なくとも担当者にとってはとても楽しい授業だった。机の上にマンガを並べての談論風発、担当者は教えることよりも教えられることの方が多かったような気がする。いずれにせよ、いろいろなマンガに触れる機会を得て、担当者にもマンガの面白さが少しずつ分かってきたのかもしれない。なにしろ、手塚治虫や石森章太郎、高橋留美子ぐらいいし知らなかった担当者が、今では一色まことの『花田少年史』を読んで感激し、おまけに『出直しといで!』まで揃えたりしているのだから。